

第十七回 齋藤茂吉短歌文学賞

三枝 昂之 『昭和短歌の精神史』

本阿弥書店

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 小池 光

永田 和宏

馬場あき子

(五十音順)

## 三枝昂之 『昭和短歌の精神史』 (抜粋)

秋になると、歌人たちの茫然自失は悲歌へと移っていった。最初の悲歌は「短歌研究」十月号巻頭の斎藤茂吉「岡の上」である。

すがしくも胸門むなとひらけばこの県あがたの稲みのの稔みりを見て立つわれは

くさぐさの実こそこぼるれ岡のべの秋の日ざしはしづかになりて

あたらぎのくれなるの実の結ぶとき浄さやけき秋のこゝろにぞ入る

沈黙ちんもくのわれに見よとぞ百房ひゃくふぶの黒き葡萄に雨ふりそそぐ

こゑひくき帰還兵士のものがたり焚火たきびを継がむまへにをはりぬ

松かぜのつたふる音を聞きしかどその源みなもとはいつこなるべき

茂吉の作歌手帳を見ると、九月二日から十日の間にこれらは作られた。二日は戦艦ミズーリで降伏文書の調印式があり、茂吉日記は九月二日を「降伏調印(忘ル、コト勿レ)午前九時」と記している。歌は「わが方の完全なる屈服」による「異常なる深刻性」(手帳五十五)を受けての悲嘆である。悲しみは行き所がなく、草や木の実の健気な生の営みが辛うじて茂吉の心を支えている。帰還兵士の話が短く終わるのは告げる物語がないからではない。語ることは尽きないが悲しみの深さが言葉を少なくするのである。経験のない事態の前で、語る者も聞く者も沈黙に陥りがちなその心を「焚火たきびを継がむまへにをはりぬ」がよく表している。松風の源に溯ろうとする六首目には「明日」という時間を失った心がかいま見られる。敗戦秋の切ない悲歌として忘れがたい一連である。

●選考委員による選評

三枝昂之氏へのお祝いの言葉

岡井 隆

画期的一冊

小池 光

三枝さん、おめでとうございます。よく調べてわかり易く説いてゐると思ひました。今までのあなたのお仕事の中では視野をひろげて公平に見ようとしてをられるのを喜びたいと思ひます。短歌史の見方を若い世代へと引き継ぐ意味でも貴重でした。望蜀の言辞を少々申し上げれば、単独の空穂論、善磨論を書いてご自身の立場を鮮明にされてはいかがですか。また戦後の短歌史については今後共、わたしどもも協力しますので深めて行きませう。

長かりし昭和のとくに前半の三十年は激動の時代であった。本著は、激動の時代を生きた有名無名の人々の行動と精神のドラマを、短歌という特殊な窓口を通して生き生きと再現し、普遍的な時代の空気をリアルに伝えることに成功した労作である。短歌史というジャンルはこれまでいわば純粹に文学的課題をめぐって考察されてきたが、本著の方法はその固定的な視点をもつと自由なものとし、人間くさいドラマとしてその時その時の短歌の変転を印象深く伝える。重厚な問題意識と軽快な筆致が相俟って、一気に読ませるあたらしい評論のスタイルが誕生した。

待望の短歌史

永田 和宏

独特の資料集成

馬場あき子

評論の不毛を言われて久しい歌壇であるが、三枝氏の『昭和短歌の精神史』は、ひさびさに出た好評論集であり、待望の短歌史であると言つてもいい。丹念に資料に当たりながら、戦後短歌がともすれば検証を怠つたまま無視してきた戦争中の作品群に、正当な光を当てた功績は大きい。

短歌という文藝は、作ること以上に、残すことがむずかしいと考えはじめている。時代時代の作品を、どのように正当な位置にピンで留められるか。三枝氏の一首一首への仔細な読みに基づく作者への遡及の態度は、ここに信頼できる同時代の短歌史の書き手を得たという思いを強くさせる。この一冊が賞を受賞したことを、選考委員の一人としても、また友人としても喜んでゐる。

著者は資料の集成に独特の才能を持っている。「戦争期と占領期を一つの視点で描き通す」という方向から、情況に揉まれながら真摯に生きようとした歌人の「作品が示している心」を掬い上げるといふ縦糸を選択した。

その方法を瘦せさせないために当時流行した歌謡や、時代の要請に応じた詩を援用することも、文章のうまみと相俟って内容に立体感を加えているといえる。著者は現実には戦時下の苦悩や哀歎を知らない世代であるが、それゆえに「後世」からの見え方が浮かび上がるのが見所である。ここでは、証言としての一級資料と雑資料のミックスの世界から推理されている時代感に著者の歴史認識が浮び上がる。それを読み方の一つに加えてもいいと思う。

## 受賞の言葉

三枝 昂之

明治三十九年生まれ。私の父は山梨県甲府市で衣料品店を経営しながら、短歌を唯一の楽しみとして一生を終えました。遺歌集が編まりましたが、そこには戦争が主題の歌は皆無、父の師植松壽樹全歌集でも戦争期は平明な自然詠ばかりが収録されています。戦争期を根こそぎ否定すべきものとした占領期文化と第二芸術論がそこには作用しています。

詩歌の出来はイデオロギーが保証するのではなく、存亡の危機にある国を支えようとした心にも、そしてその願いが挫折した失意にも、香り高い詩はある。斎藤茂吉をはじめとする歌人たちの作品がそう教えています。

祖父や父の世代の歌と心に耳を傾け、あったことはあったこととして提示し、短歌の軌跡があるがままに描きたい。それが私たちの世代責任の一つではないか。そう考え、昭和の日々にタイムスリップし、現場の実況放送のつもりで書き綴ったのがこの一冊です。

それだけに、戦中戦後を「かたよらない態度で、公平に観察し」という選考理由はとりわけうれしく、感慨深いものがあります。

分厚い本は敬遠される時代、地味な短歌史研究を評価してくださった選考委員の方々、そしてご推薦下さった皆様に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。



### 第17回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

#### 三枝 昂之 (さいぐさ たかゆき)

歌人。1944年（昭和19年）山梨県甲府市生まれ（62歳）。  
神奈川県川崎市在住。  
1968年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。在学中「早稲田短歌会」に所属。  
「沃野」「反措定」「かりん」を経て、1992年「りとむ」を創刊。

#### 歌集

「やさしき志士達の世界へ」  
「水の覇権」（第22回現代歌人協会賞）  
「地の燠」  
「暦学」  
「塔と季節の物語」  
「三枝昂之歌集」  
「太郎次郎の東歌」  
「甲州百目」（第3回寺山修司短歌賞）  
「農鳥」（第7回若山牧水賞）  
「天目」

#### 評論集

「現代定型論」  
「うたの水脈」  
「正岡子規からの手紙」  
「前川佐美雄」

#### 対論集

「歌人の原風景」

#### 共編著

「昭和短歌の再検討」  
など

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
- 第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
- 第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
- 第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
- 第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
- 第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
- 第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
- 第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店
- 第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社
- 第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房
- 第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる斎藤茂吉』 短歌新聞社
- 第十五回 清水房雄 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 第十六回 小池 光 『滴滴集』 短歌研究社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部県民文化課内  
TEL・〇三三一六三〇一―二九〇三